

犬が逃げた。

逃げた、というよりも彼にとつては遊んでいるつもりなのだろう。わたしが一緒に走っていると思っている。だから追いかけてはいけない。追えば余計に興奮して走ってしまう。

だけど、その場でくつと、立ち止まり、彼が振り向き、駆け寄ってくるのを待つわたしの思惑などに引つかかることもなく、彼は駆け抜ける自分自身の体感に陶醉しきって、そのままのスピードで角を曲がって行ってしまった。「もう、ばか。」と、心の中で呟きながらわたしも走り出した。

そこは、市街地から少し離れた巨大なショッピングセンターで、畑の真ん中にたった一晚で立ち上がったかのような空々しい偽物の建物が隣立していた。休日のせいで、訳も分からずバスでピストン輸送されて来た大勢の買い物客で賑わっていた。わたし自身も自分が何の目的でここに来たのか、見失っていた矢先の出来事だった。

人混みに紛れてしまった彼の姿が見えない。だけど、きつと近くにいる。彼は耳がいいから、少し離れていたって私の声が聞こえるはずだ。大勢の人の前で大声を出すのは、少し躊躇われたが犬の名を呼ぼうとした。だが、なぜか名前が出てこない。大きく吸い込んだ息が無目的に口から吐き出された。

名を呼ぶのは諦めて、「おーい」と言いながら雑踏の中を当てずっぽうに小走りした。

彼は出てきてくれない。

微かな不安が滲んでくるのを感じていた。

どの「夭折のカリスマ」と呼ばれる者の名前を一通り出させてようやくその名を思い出せた。

頭の中を空白で埋め尽くされそうになる不安を無理矢理に隅に避けて、「大丈夫、絶対にどこかで無事にいるはず」と、呟いていた。

ついに、辺りから彼の気配を感じなくなった。

彼を見失ってから三日が過ぎた。

後頭部に空いた穴から真っ黒な墨汁を脳みその中へ注ぎ込まれた感覚で過ごしていた時間だった。

わたしは、友人から聞いたある施設を訪ねてみる事にした。

その公園は、彼と離れたあのショッピングセンターから二百メートル程しか離れていない場所だった。

敷地のほとんどは、四角くスライスされた人工の御影石が敷かれ、中心には、噴水が備えられていた。コンクリートでできた東屋と機械的に刈り込まれた植え込みが無意味にぼつんぼつんと配置されていた。昼間だと言うのに人がなく、開けてはいるが、どことなく殺伐とした雰囲気のところだ。

公園の片隅の、ふつうにその公園を通り抜けるだけでは気付けないような場所にその施設「迷子犬預かり所」があった。ここは、引き取り手がなければガス室送りになる犬のための一時留施設だと、察することができた。

割合と広く、寂れた動物園の小汚い鳥小屋のような檻の中。数匹の中型犬が入れられていた。たいして探すでもなく、彼がそこにいた。

こわばっていた心に少し体温が戻った気がしていた。その時も彼の名を呼ぼうとしたが、思い出せなかった。係員に案内をされ、檻から少し離れている所から見た彼

ペットショップのショーウィンドウにへばりついている小さな女の子がいた。子猫たちが戯れている姿を凝視しているその子の半歩後ろで微笑んでいた母親に、この辺りで犬を見かけなかったかと尋ねてみた。その時も彼の名前を思い出そうとしたが、思い出せない。見ず知らずの人に自分のペットの名前を言っても何の意味もないのだけど。彼の名は、喉元まで出かかっている。その母親は首を傾げた。

その後も人に何度か尋ねてみた。はじめは、不機嫌そうな顔でベンチにじっと座っているおじいさんやバレンタインデー用のチョコの試食を振る舞っていた店員など、彼がそこを通れば目に留めていそうな人たちに声を掛けていた。

他人の煮え切らない反応に苛立ちが募り、そのうちに誰彼構わずに片っ端から尋ねていた。その度に彼の名を思い出そうとしたが、思い出せない。何となく思い出せたことは、本当はかな三文字の名前を、彼に語り掛ける時は最後の一字を削って二文字の名で呼んでいた、気がすることだけだった。

まだ近くに彼の気配を感じていた。焦っていた。楽し気に跳ねながら走る彼の姿と車に轢かれる姿を交互に思い描いてしまっていた。泣き出しそうになるのを必死に押さえて「おーい、おーい」と叫びながら走った。

何かが記憶から抜け落ちていたのを感じた時、首の左側面がすかさずかと頼りなくなる。大切なことを脳に確実に刻み付ける方法をわたしは知っているのだろうか。

先日の大雪の日。真っ直ぐに帰るのは何だかもったいなくて、友人と酒を飲んだ。取り留めのない話の中、あるミュージシャンの名前が出てこなくて、一緒に酒を飲んでた友人に「自殺をした人」というキーワードを出して、ジミ・ヘンドリックスやジャニス・ジョップリンな

可愛い犬。

わたしは、本当に彼を愛していたのだと思う。

彼には、名前がなかった。

この短編は、二〇〇八年の個展「思い出せない」のために書き下ろした。

個展の際は、テキスト内に出現するモチーフを絵画やオブジェクトに置き換え、インスタレーションとして展開した。今回は、グループ展「Blue Valentine」のために、当時の展覧会を再解釈し、提示した。

本編も改訂。

会期：二〇一三年二月十日～三月三日

会場：XYZ collective 東京